

〜陰干しノ蝶〜

登場人物

藤崎 ひろ子 藤崎成美の母。おっとりとした女性。美人と噂で村では誰もが振りかえる。一児の母。見合い結婚の夫は単身赴任でひと月に数回戻る程度。おっとりした性格で頼まれると断れない。

武山 慎吾 …フリーター。村では新聞や日用雑貨の宅配の仕事を手伝っている。人見知りがありいつもおどおどしている。思い込みが強く、その結果、誤解や衝突が多い。

1、蝶の滴り

五月の連休が終わり、朝も早くから鬼瓦村にも初夏の風が吹く。深緑を携えた木々は空を舞う鳥たちを応援しているかのように枝を振っていた。そんな中、大蛇川を横に走るカブ一台。対向車どこか通る者も滅多に居ないというのに法定速度を守ってのんびり走るそれは、籠にいつぱいの朝刊を抱えていた。

村内に点々とする家々を回ってはポストに突っ込み、時折地図を見る。指差し確認後、次の家へと向かってアクセルを吹かす。

そろそろ老人達が散歩を始めそうな時間になるもまだ終わらない。せっかちな人なら配達を待たずに自分から販売店へ行って直接もらうこともあった。

「……えと、次は……」

新人配達員の武山慎吾は地図を見ながら右往左往していた。

雨に濡れて汚れた地図は滲んで見づらく、どこが配る家かわからない。そのせいで昨日も誤配をして怒られた。それならしつかりした地図を用意しろと思うも、気の小さい彼は言い返すことなどできなかった。

今日も時間を大きくオーバーしての配達。きっと営業所に戻ったら怒られるのだろう。そう思うと憂鬱で足が遠のくが、照り始める朝日も辛いのだからと急いだ。

予定より1時間程遅れて配達を終えた慎吾が営業所に戻ると、主任の鹿島伸介が電話相手にペこペこ頭を下げていた。

「すみません。はい、明日はもっと早く届けるよう伝えておきますから。はい、すみませんでした……。はい、失礼します……」

どうやら遅配のクレーム対応の様子。当然原因は慎吾。早速どやされると思い、慎吾は神妙な顔で先に自分から頭を下げる。

「主任、すみませんでした……」

「……ああ？　　ったく、てめえはいい気なもんだよな。すみませんでした、すみませんでした……。何度目だ？　　ったく、一体いつになったらまともに配れるんだよ。新聞配る程度だろうが、このウスノロ」

「すみません」

「そうやってすみませんすみません。たまには気の利いた事言えねえのか！　　ったく、ああい、あっちいけ……ったく、朝から鬱陶しい」

伸介はしばらく怒鳴るも最近では呆れているのかこれ以上関わりたくないと手であっちいけのジェスチャー。

「明日は気を付けます」

慎吾は一応の謝罪を告げてからタイムカードをきる。

三時から始まって七時まで……。普通のバイトなら最低賃金の二割増し。けれどここの営業所は歩合制。配った部数かける十円。時間をかければかける程、実質的な時給が下がる。結果、今日の出来高は鬼瓦村の最低賃金を下回った。

「……………」
それでも文句を言えないのが慎吾だった……。

次の日、慎吾はいつもより早く営業所へやってきた。

最近朝が早くなっていることもあり、人が少しでも居ない内に回ってしまおうと考えたのだ。

「おはようございます」

「お、今日は早いな」

営業所では伸介が新聞に折り込みチラシを入れていた。もう担当が出来上がっていたのでバイクに載せる。少しでも早く行きたいのでエンジンを掛けるとナラシもせず走り去っていた。

「あ、おい、待て……。あー……。つたく、あのバカ……。バイクちゃんと見ろよ」
伸介が追いかけてようやく出てきたが、その時には既に丑三つ時の闇に消えていた……。

「……………えと、次は……………」

深夜に配るのは意外と都合が良かった。

実技の時に言われた通りの長袖、手袋着用。彼は普段だと暑くて仕方がない。けれど、夜の涼しさの中だと都合が良かった。

そして夜だと人が居ない。面倒な白黒と赤色灯の車も見当たらず、いつの間にかスピードは……。

普段より早く配達を進めることができた慎吾は心に余裕が生まれていた。

普段ならいちいち見ない村の景色をよそ見しながら危険運転。まるで村を静寂で支配したような錯覚が楽しかった。

「ふふーん」

楽し気に鼻歌を歌いながら村を走った。

村では家の密集地帯がいくつか点在する。慎吾は村の外れの方まで担当しており、そのせいで時間がかかる。

村の外れは明かりも少なく、山に続く道もあり、たぬきを轢いたという話もよく聞く。どうしてもっと村の真ん中に住まないのかと愚痴っていた。

「……………」

ふと気づく。明かりが乏しい。よく見るとライトの光が弱かった。

「なんだよ、ったく、ちゃんと整備しとけよ……」

営業所では絶対に言えないような口調で独り言。一旦エンジンを切って改めてつける。すると一旦は光が着くが、すぐに弱くなる。

もしこのまま走行して警察に見つかったら違反を指摘されるのではないだろうか？ そう思うと一旦主任に連絡をして別のバイクを貸してもらおうべきか……。しかし、普段から不機嫌な主任のことだ、どうして出発する前にバイクを調べないのかと怒られる。

主任に怒られるのと警察に怒られるのならどちらが良いだろう。社会的には警察のほうが怖い、狭い世界に生きる慎吾にとって怖いのは主任。携帯をしまおうと再びバイクを走らせ……。

暗がりの中、何とか配達をする慎吾。普段より早めに出たことと、ライトの都合でいつもより注意していたことで配達忘れも無く順調に進んでいた。また、特に暗いところは明るくなってからにしようとして後回しにしたことも功を奏したのだろう。

あと二十件程度となったところで明かりを見つける。自販機だろう。

まるで誘蛾灯に誘われる蛾のようだと思いつながら、疲労を癒す蜜が欲しい。ひとまずバイクを路肩に止めて財布片手に走っていく。ついでに向いの家そのまま配って来ようと思つた。

「……」

藤崎家の表札を見て新聞を入れる。何かジュースを飲もうと自販機を探すも、明かりが無い。どこへ消えたのだろう。先ほどまで光っていたのに……？

まさか自分をおびき寄せる物の怪の類……。などと考える程しやれを言える性格でもなく、見間違いとすぐに切り替える……。が、わかった。先ほど光っていたのは洗濯物だ。

藤崎家の庭先にはこの時間だというのにシートがあった。そこに家からの明かりとバイクの弱い光が当たって自販機を錯覚したので。

人騒がせなものだと思ひ、庭先のシートを軽くパンチ。おぼけをやったつもりになってもなつて帰ろうとした。しかし、そのパンチが袖のボタンに引っかかり、ずるずる落ちる。

「あ……」

慌ててシートを抑えて落ちないように注意する。最悪の事態は免れた。一息ついて整える。すると別の洗濯物に目が行く。

ハンカチだろうか、三角形の布がいくつつか。

縞模様、ストライプ、ギャザー付き。色こそわからないけれどカラフルなだろう。

「……」

それが何であるかを理解した時、目の前がくらくらとした。息苦しい。股間も苦しい。目の前にあるのは女性もの下着、パンティだ。

「…………え…………え？」

普通、女性は下着を外に干すのだろうか……？

素朴な疑問だった。

下着泥棒という言葉があるのだ。当然ターゲットは女性。そしてこの下着は男物ではない。では、なぜそれが今の時間に干してあるのだろうか？

こんな時間ではヨコシマな人間が欲望に任せて盗んでしまうのではないだろうか？

他人事に余計な心配と思いつつも思考が巡る。そして視線が外せない。

よく見ると紐状に申し訳程度の布地のモノもある。グラビアでたまに見るようなモノ。お世話になることもあったが、こうして目の前にあると気持ちが高まってしょうがない。

女性本体が居ないというのに、現物だけあっても……。

時折見かけるパンティ付きの青年情報誌を思い出す。実際に購入した時は興奮したけれど、安物の生地で新品のパンティを前に醒めてしまった。結局はオナニーしたチンポを拭くのに使って捨てた。買う前は色々用途を考えていたが、騙されたような気持ちになり二度と買う気になれなかった。

だが、今こうして目の前にあるパンティは違う。家に届いた時の興奮を思い出す。その違いはなぜだろう。それはおそらく使用済みという確たる証拠。

干されているということは洗濯されたということ。選択されたということは汚れたこと。汚れたのはつまり穿いたから……。女性かしつかりと着用したのだ。

どんな人が穿いていたのだろう。わからない。所詮は田舎者の集まり。モデルのような人は想像できない。普段から野良仕事で人目もはばからずケツを搔くような人だろう。期待するだけ裏切られる。例の本のように……。

そう思い、自分を無理やり落胆させる。そうでなければ手を伸ばしてしまいそうになる。それだけチンポが痛い。最近はまだともに自慰をしていなかったこともあり、チンポのおさまりが着かないようだ。

ヤンチャな愚息を宥めつつ、引き返そうとする。その時、ふっと風が吹いた。家の方から。扇風機特有の方角無視の風。それが外に向かって吹いているということは、窓が開いている……。

やはり田舎だから用心と言う言葉が無いのだろう。ここら辺はクマの被害も無いからさらに警戒心が無い。そして、その警戒心の無さから、きつとこの下着の持ち主もそういうことをされるようなタイプでないと思えた。

「…………ん…………」

どきっとした。人の声。寝言。それが聞こえた。誰か居るのだろうか？ 当然だ。居なかったらホラーだ。問題は起きているかどうか。もし起きていたら自分は不法侵入者。いくら庭先と道路の垣根が無いとはいえ、こんな時間に入ってよいはずがない。しかも下着を目の前にうろろしているのだ。言い訳などできそうにない。

「…………」

だが、誰かがやってくる気配はない。本当にただの寝言だったようだ。ほっと一息つくと、今度は無性に腹が立つ。

——人を脅かせやがって……。

身勝手な怒りに一体どんな顔をしているのか見てやろうと思う。無防備なまま、窓も開けっぱなしで寝ている相手を見下ろせば、何をするわけではないけれど優越感に浸れるだろう。そう思うことにした。

「……」

窓の方へ歩き、そつと中を伺う。畳の部屋には布団が一組のみで、誰かが横になっている。先ほどの声からして女の人だとわかっている。どうせデブでブスだろうと思っていたが、それでもいいから覗きたい。既に気持ちは優越感という嘘からヨコシマな本心へと変わっていた。

「……ふう……んう……」

鼻にかかった声があった。そしてすぐに寝息。完全に寝ているのだろう。こちらにお尻を向けて寝ており、月明かりの下、青白く見える。

「……」

横になっている女性を覗く慎吾。暑さもあつてか薄着で短パン、タンクトップという恰好。顔はわからないが、よく村の中でも見かける見たくない類の恰好だ。

背は低く、少し丸い印象を受ける体型。お尻は大きく、短パンのサイズが合っていないのかぴっちりしている。そして浮かび上がるパンティのライン。どきりとさせられた。当然だ。童貞の慎吾にとっては村の中年おばさんが寝転がっていたとしても女と感じてしまう。それぐらい女性に対して欲求が溜まっており免疫が無い。

慎吾は目を丸くして食い入るように女性を見る。この際顔は見なくていい。いや、見たくない。また裏切られるだろうし、それならむっちりしたお尻を目に焼き付けておきたい。家に帰ったら忘れない内にこのお尻、短パン越しのパンティでオナろう。そう決めた。

「んふうん……」

鼻にかかる声は悩ましく、目の前の女の無防備な姿に我慢汁を滲ませられた。

「ふうん……」

寝返りを打たれた。もしかしたら起きています？ それよりも顔をみたくない。後ろ姿だけなら想像も捗るのに、トドや豚だったらそれもぶち壊し……。

「……」

しかし思惑は良いほうに裏切られる。思ったより、思った以上に美人だった。

目鼻整った女は余計な脂肪がすくなく綺麗な小顔。長いまつげと整った眉。赤くふっくらした唇が印象的で、モデルと言っても通用するような美人。

こんな美人が村にいたのだろうかと思うも、確か居た。前に営業所に見慣れぬ雑誌があったが、そこにはモデルに選ばれた村民が数人。他にも読者モデルとして何度か掲載された子がいるらしく、掃き溜めに鶴は確実に数羽いる。その一人が確か藤崎ひろ子。この家の人だと



思いだせた。

一児の母である彼女はママモデルとして雑誌を飾ったことがある。村の人がまるで自分のことのように自慢していたのを思い出す。

慎吾は裸の無いファッション誌に興味も無く、特に意識していなかった。いくら美人と言ってもどうせ画像加工ソフトで修正した結果だろうと高をくくっていたのも理由だ。

だが、こうして見ると確かに美人だった。寝顔でもわかる。この人は美人。確か娘も読者モデルに何度か選出されていると聞いたし、村から初のアイドル誕生として噂されていた。

無防備な姿を晒すひろ子。ホットパンツは留め金がされておらず、縞模様のパンティが見える。

年齢に似つかわしくないけれどむっちりした肉を内側に閉じ込めたパンティに目が向かう。

どんな臭いがするのだろう。触ったらどんな感触なのだろう。舐めたらどんな味がするのだろう。

触ってみたい。もう濡れているのだろうか？ 温かさ。柔らかさ。それとも弾力があるのだろうか。中はどんなだろう。チンポを入れたらきつと気持ちが良いのだろう。こんな美人に脱童貞してもらえたらどんなに嬉しいだろう。

「……………」
鼻息が荒くなる。視線はホットパンツとパンティにくぎ付けだ。もう少し前で見よう。もつと見たい。

「……………」
パンティに気を取られていたが、タンクトップもガードが緩い。肩紐がずれ、ふつくらとした乳房が零れかかっている。

「……………」
扇風機が緩く回転している。もつと頑張つてほしい。弱など弱気なことをせずに強で回って欲しい。それこそ台風やハリケーンのように。そしてタンクトップをずらしてほしい。そうしたらきつとブラジャーが見えるはず……。

そんな願いに首を振る扇風機。願いはかなわず乳房はタンクトップに隠されたまま……だったが、うるさそうに頭を掻く仕草と同時に肩紐がずれた。同時に零れる乳房。寝る時でもしつかりブラジャーをしているおかげで形をキープしているのだろう。ふつくらとした乳房が想像できた。

「あと少し……………」
パンティとは違うフリルのついたもの。上下が違うのはなぜだろう。意外とずぼらなのだろうか？ こんな時間まで下着を干すぐらいなのだし、そこだけは残念な気がする。

「……………」
ふと横目で洗濯物を見た。そこで少し勘違いに気付く。一つだけ水が滴る洗濯物があった。他は夜露で湿り気があるだろうけれど、フリル付きのパンティだけはしっかりと水が滴っている。それはつまり、つい先ほど洗ったからではないだろうか？ つい先ほど汚してしまっただから下だけ変えた。

「……………」
「ごくりと生唾を飲む。自分の想像が正しいかはわからない。だが、今、水が滴る理由が他に思いつかない。あるいはそう信じたい。どちらだろう。」

「……………」
慎吾は手を伸ばすとフリル付きの下着を手にしていた。音が出ないように注意してゆつくりと取る。水が滴るけれど絞らない。その水滴すら、お宝に思えた。

急いでバイクに戻り、新聞の袋を開き、パンティを入れ、ポケットにねじ込む。ふと思いつき、またサステインに手を伸ばす。洗濯バサミの一つをゆつくり広げて壊し、そのまま地面に落とす。

慎吾は寝ている家主に気付かれていないことを確認し、またバイクに戻った。

あと十数件。三十分とかわからない。すぐに終わらせてすぐに帰ろう。今日は思いのほか素晴らしいオカズができたのだから……………。

いつになく早い到着に伸介は意外そうに視線を向ける。

出発が早かったこともあるからそれも当然だろうけれど、それでもいつもより数十分早かった。

「お、早かったな。今後もこの調子で頼むぞ」

すれ違いざま、労いのつもりでトンと背中を叩く。

「!!!」

「うわっ」

背中を叩かれた瞬間、慎吾は飛び上がるかのように背伸びし、拍子に近くの机を蹴る。その衝撃でチラシの数枚が散らばってしまう。

「おい、何してるんだよ。ったく、褒めたと思ったらこれかよ……」

「すいません、すいません！」

慎吾は慌ててチラシを拾い集め、まとめてゴミ箱に捨てる。その片手仕事っぷりはちまちまましており、伸介の苛立ちを誘う。

「いいよいいよ、もう帰れ。ったく、ほんととろい奴だな……」

「すいません、それじゃ失礼します……」

いつもなら片付けるまで残る小心者で律儀者なのだが、今日に限ってそそくさと部屋を出る。片付けを押し付けられるのは不快だが、邪魔者が居ないことと相殺すればトントン。伸介は適当に床磨きしながらチラシを捨てた。

当然、慎吾がポケットを庇っていることなど気付かない……。

「はあはあ……、うう、はあ……」

帰宅と同時に真っ裸。シャワーで汗を拭い、包茎のチンポの皮を捲って恥垢を洗い流す。普段なら帰ると同時にパソコンでアダルト動画を鑑賞しながら昼ぐらいまで寸止めオナニーを繰り返すのだが、今日は汗を洗い流し、下着も変えていた。

これからするのも結局オナニーなのだが、おかずに違う。

本物の女性のパンティ。洗った後とはいえ使用済み。情況から察して使ったばかり。もし推測通りなら、女がオナニーをして汚した後……。

頭を拭きながら居間に戻り、袋を広げる。パンティは絞れば水が滴る程度に濡れている。手をタオルで拭き、おそるおそる取り出す。

臭いはしない。いや、洗剤の匂いが広がった。やはり洗ってすぐだ。

パンティをビニールの上に置き、眺める。

村でも噂の美人が穿いているパンティ。それも紐パン。明るい場所で見るとそれは情熱的な赤。布地も薄く、向こうが透けて見える。

もしこれを通いたら、肌がうっすらと見えるのではないだろうか？ モザイク越しにしか

見たことが無い女性の下半身を妄想すると、自然とチンポが固くなる。

先ほど脱いだばかりのトランクスはべっとり和我慢汗がついていて、それがようやく収まったと思ったのに、またこの勃起具合と汁具合。現物の持つ破壊力が童貞の慎吾を殺しにかかっていった。

「うう……はあはあ……なんだよ、これ、人妻の癖にこんな派手なパンティ穿きやがって……。バカじゃねーの？ 年考えろよ。子供居るクセによ……。つたく、これで旦那とよろしくやってるんだろ？ まじで羨ましいな。ババアのクセによ……」

年頃の子供が居るのだからよくて三十路後半、悪ければ四十代。そんな女のパンティごときで勃起させられることが悔しい。それもこれも全ては童貞であることが悪い。

「くそ、くそ……、エロババアが、こんな年甲斐も無い恥ずかしいパンツ穿いたら娘が恥ずかしいだろ。罰として没収だ。これは俺が楽しく使わせてもらうぞ。ええと、藤崎さんよお……。今から俺が藤崎さんの奥さんのパンツでオナニーするから、それで許してやる。いな、これはバツだ。しょうがなくオナニーしてやるんだぞ。こうでもしないと藤崎さんは外に恥ずかしいスケスケの紐パン干すのやめないだろ……。娘さんがいるのにこんなパンツ穿いて、干して……。オナニーしてたんだろ？ 夜中に一人で……」

一人寝床に横になる女の姿を思い出す。夫婦のはずがどうして一人？ いや、一人だから夜中にオナニーをしていたのだろう。だから、どうして一人？ わからない。どうでもいい。重要なのは三十過ぎた女が夜中に一人でオナニーして、下着姿を無防備にさらして寝ていたという事実（推測）だ。

「へへ、しっかし、こんなパンツ穿いて、ほんと変態だな……。つたく、どうなってやがんだ……」

パンティを見ているだけでも興奮してしまう。

香り立つ洗剤の匂いは村で売っているもので特に違いは無い。けれど、何かこみあげるものがある。やはり女性が穿いていたという事実があるせいか、それが生々しく鼻孔にバイアスをかけていた。

チンポを握り、軽く抜く。ぬるっとした感触。いつもよりすごい。極上のおかずを前に興奮が収まりそうにない。どろっと出る汁はとめどなく、畳にこぼれてしまう。

慌ててそれを拭き、ティッシュを丸める。

「はあはあ……くそ、エロババアのパンティぐらいで……。くそ……、すぐオナニーしてやるからな……。このエロババアのパンツが……」

安直に罵りパンティを掴む。そして股間部に当たる布地を見る。透けているとはいえ、クロッチ部分はある程度厚かった。

裏地は肌触りが良さそうな絹素材。そのせいで手洗いをしていたのかもしれない。

「……………え」

白の布地が、色がついている。少し黄色い。

「……………は、は……、尿漏れかよ。まじババアだな。つたく、ババアのションベン臭いパ

ンツなんか誰が楽しくて嗅ぐんだよ……。くっはあ……。くせー……。まじババア。女は三十過ぎたらおばあちゃんだな。盛ってこんなパンツ穿いて何がしたいんだ？ 周りにおだてられてパンティに色気をだしちゃいましたっか？ はっずかしいねえ……。まじ恥ずかしいよ。藤崎の婆さん……。あっはは、こういうパンツは若いネーチャンが穿くもんだよ。中身空っぽの女がマンコで男釣るためにさ……。おばあちゃんが穿くもんじゃないんだよ。ったくさ……。くんくん……。」

臭いは相変わらず洗剤の匂いのみ。けれど匂いがあるかのような気がしてしまう。

鼻を鳴らし、接着するぐらい鼻を近づけて……。もうくっつけて臭いを嗅ぐ。それどころか舌を伸ばしていた。

女の股間部分に当たる場所なのだと思っても止まらない。むしろ急かされる。パンツの染みを舐める。そう命令された気分。

「ん……。苦い？ ………………にがい……………」

舌尖に広がる苦味と痺れにシャボン遊びを思い出す。期待していたような女性の味ではない。ただの洗剤だ。当然甘いはずもなく、がっかりする。だが、女性の股間が触れていた部分を間接的に舐めたことも事実。つまり間接クンニリングスができた。自分はただの童貞ではない。クンニリングス経験者だ。

「うう……。はあ……。ババアのマンコ、苦いな……。やっぱマンコは若いほうがいいな。ったく、ありがたく思えよ。こんな経産婦のびろびろマンコを舐めてやってるんだからよ……」

鼻息を荒げながら一心不乱にパンティを舐める慎吾。瞬きも忘れた目には涙が滲む。同時にチンポからもじみ出る汁。

「うう……。はあはあ……………」

勃起したチンポを握りしめ、ゆっくりと上下させる。

「うっ……………」

びりっと快感が走る。思った以上に気持ちが良い。いつもより敏感になっている。その原因は当然この紐状の布。

「はあは……………」

目を瞑り思い出す。網戸越しに見た寝そべる女の姿。

美人と噂される彼女は運動不足が少し見えるややぽっちゃり。柔らかそうな肌を露出させ、丸く大きなお尻をこちらに向けていた。

本当はあの時、あの女は寝ていなかったのではないだろうか？ 実は起きていて、慎吾が来たことに気付いていた。そしてお尻を振って誘っていた……。網戸を開けていたのもすぐ入れるようにしていた。就寝前のオナニーも童貞の慎吾がすぐに入れられように濡らしていた。本当はあの時、レイプしてほしかったのだ……………。

「夜中に男誘惑してレイプされたいとか変態だな……。まじやべーわ……。ま、俺はそんなババアの誘惑なんて効かねえけどな。色キチガイかよ。そんなに入れてもらいたかったの

か？ あ？」

乱暴な口調を並べるけれど声は震えている。瞼の裏に思い起こす女の姿。パンティを手にしてクロッチを舐め舐めしている事実。その二つが慎吾を興奮させ、今すぐにも絶頂させようとしていた。

「くそ……うっ……うう……」

いつものオナニーよりずっと気持ちが良い。新鮮で生々しいオカズはアダルト動画の比ではない。

今日も童貞を守る慎吾にとってセックスと言えば画面を通した動画のみ。風俗のデブでブスな怪物に金を払う奴を内心嗤っていた。ウチにはもっと美人でスタイルの良い女がいるのに、どうして魔物相手に高い金払ってオナニー手伝ってもらうのだと思っていた。

だが、今日でそれが間違いだと思えた。

やはり生身の女の方が良い。

多少ブスでもデブでもいいから、ナマの女に触れたい。

だからみんな高い金を払ってまで風俗に通うのだ。

自分も今度の給料日に風俗に行こう。そこで脱童貞してくる。

そう決めた。

「うっ……！！」

目の前でこちらに寝返りを打った女を思い出す。谷間の出来た胸は暗がりの中でかろうじて見える程度。それを若干妄想の中で大きく修正した。ついでにそこに自分のチンポを挟んでみる。同時に顔にぴゅっ……………。

「はあはあ……うっ……ああ……」

ぴゅぴゅっと勢いよく飛ぶ精子。初めて自分で射精した時のような勢いだ。懐かしい新鮮味のある射精感。ケツがきゅっと締め、身体を誰かに強制的に動かされているような感じでかくかくっとなる。

「……………」

薄目を開けると畳にはどろっとした濁り汁。青臭さを漂わせながら、徐々に染みを作っていく。

「くそ、ババアのせいだ」

気怠い身体を起こし、ティッシュを掴み汁を拭う。

「……………」

次の給料日は来週。休みもある。だが、行く気にはなれない。わざわざ魔物に金を払ってオナニーを手伝ってもらうより、赤外線カメラで盗撮した方が良い。

「さてと……」

まだザーメンを滴らせるチンポをトランクスにしまうと、慎吾はパソコンを立ち上げる。赤外線撮影ができるカメラの値段は……………。